

明治中期までの石川県教育の一面：当時石川県からなぜ多くの高等教育進学者を輩出したか？

| | |
|-----|---|
| 著者 | 江森 一郎 |
| 雑誌名 | 市史かなざわ |
| 巻 | 10 |
| ページ | 75-83 |
| 発行年 | 2004-03-31 |
| URL | http://hdl.handle.net/2297/7481 |

明治中期までの石川県教育の一面

—当時石川県からなぜ多くの高等教育進学者を輩出したか?—

江 森 一 郎

1、はじめに

ここでは、はじめに第四高等中学校が金沢にもうけられた事情と初期の第四高等中学校の生徒構成の特徴を考察し、次に『久徴館同窓会雑誌』から明治二十年代中期に石川県出身学生が当時の高等教育界で多くを占めた事実、また、そのことが中央でも話題になってきた事を示し、終わりに、前田家を中心とした土族救済のための育英事業の概要を示す。これらの事実の背景として、幕末・維新期の加賀（金沢）藩の教育努力自体を明らかにすべきであるが、それはまた他の機会を期したい。

2、金沢への第四高等中学校の設立時事情

皇族、華族が太政大臣、左右大臣を占め、行政の実績があがらなかった太政官制に代り、一八八五（明治一八）年に内閣制度が発足し、その初代文部大臣森有礼のもとで、いわゆる「諸学校令」や関連文部省令が矢次早々に制定され、ここにはじめて帝国大学から小

学校にいたる戦前の学校体系の基礎が築かれた。

それまで地方により内容と質（程度）がバラバラで乱立状態であった中等教育においても、「中学校令」（一八八六年四月十日）、「尋常中学校ノ学科及其程度」（文部省令第一四号、一八八六年六月二二日）、「高等中学校ノ学科及其程度」（文部省令第一六号、一八八六年七月一日）などが次々に制定され、その学習基準や範囲が明確にされた。この時代にはじめて構想された高等中学校は、当時唯一の大学として発足したばかりの帝国大学のための予備教育機関としての性格とともに、地方における高等専門教育の完成教育機関としての二重の性格が期待された。¹⁾

新設される高等中学校の設置場所の選定は、文部大臣の権限とされたが、東京大学予備門を前身校とする東京の第一高等中学校および官立大阪中学校を明治一八年に改組した大学分校の再改組による大阪（明治二二年、京都に移転）の第三高等中学校の設置は、中学校令の制定と同時にスムーズに行われた。

これらに続いて、すなわち第二、第五高等中学校の設立に先立っ

て、金沢への第四高等中学校の設置が決められた。すなわち、一八八六（明治一九）年一月三十日文部省告示第三号による高等中学校設置区域の明示（第一〜第七区域）とともに、第四区域（新潟県、福井県、石川県、富山県）では、金沢に設置すると明記され、同時に「第二第五区ハ追テ之ヲ定ム」とされた。一八八七（明治二十）年十月二十日には、文部省告示第一〇号により、各校の定員が定められ、第四高等中学校は、第二高等中学校とともに「本科・予科460人、医科200人、計660人」と決められた。

第四高等中学校が金沢に新設されることが決まったことは、石川県や金沢市のその後の歴史に大きな影響を与えることになったことは言うまでもない。金沢の他に全国五箇所しか予定されていなかった高等中学校がいち早く新設されることになった理由には、いくつかの側面が考えられる。

まず、旧藩主前田家をはじめとする多額の地元負担金の負担などが、早くから見通しがついたこと（前田家分は、七万八千円余、ちなみに、五高の設置された熊本県では、旧藩主細川家は、一万円抛出したのみである。）、また設置場所選定中という情報を早くからえた地元有力者・教育関係者が、熱心に誘致や募金活動を行ったという要因もあるが、当時すでに金沢の地から多くの学力のある人材を出していた事が、文部省関係に知られていたという理由も大きかったと思う。以下その点にかかわり少しく論じてみたい。

一八八七（明治二十）年十月二十六日の第四高等中学校の開校式典に自ら臨んだ初代文部大臣森有礼は、「前田侯ヲ首トシ、石川県下

無数ノ篤志者」が、「巨額ノ金圓ヲ寄付」した事の「為に」第四高等中学校を金沢に設置しえたと言明しつつも、「本校ハ第二、第五ニ先シテ、開校式ヲ行ヒ且生徒ノ中ニハ本科ニ入り得ル者数名豫科ニ入り得ル者殆ント百名アリトイフ余特ニ満足スル所ナリ」と言っている。自ら多額の寄付を行って、国際競争に対抗しうる国家的指導者養成の道筋を確固としたものにしたかった森にとつて、「本科ニ入り得ル者数名豫科ニ入り得ル者殆ント百名」という生徒数をはじめから予想しえた第四高等中学校の発足は、真に心強かったと思われる。

なお、ここで「豫科」といわれる課程は、文部省令第一六号第七條により、「高等中学校ニ於イテハ豫科ヲ置ク事ヲ得」として、尋常中学校の三年以上の学科、程度を授ける場所とされている。「尋常中学校の三年以上の学科、程度」とは、この省令に先立って、すでに述べた同年六月二二日付けの文部省令第一四号「尋常中学校ノ学科及其程度」で具体的に決められている。

すなわち、当時の世界の学問の最高水準を短期間に習得してもらう、エリート集団として構想された帝国大学の要求する外国語や近代科学の成果の国家的習得水準が厳然と存在していた。しかし、それを満たす学生を多くの地域でいまだ養成できていなかったが、地方都市としては例外的に金沢では、高水準の中等教育を施しており、高い学力水準の学生がすでに多く養成されていたからである。これは、二高中、五高中の設置された仙台や熊本的事情と大きく違っている。先ず二高中、五高中発足時の状態をみると、

「第二高等中学校ハ本年四月之ヲ設置シ、九月ニ至リ始メテ生徒ヲ募集セリ。抑々本校ハ創設ニ係リ以テ其ノ応募生徒ノ本科ニ入ルヘキ資格ヲ有セサルハ勿論豫科生ノ如キモ十分ソノ人ヲ得難キノ状アリ。因リテ先ス豫科課程ヲ仮定シテ三学年トナシ最下級ノ生徒ヲ募集セシニ之ニ応ズルモノ総テ七十三名ニシテ合格者僅カニ七名仮入学ヲ許セシモノ二十名ニスギズ。…」

「第五高等中学校ハ本年五月之ヲ設置シ、…生徒ノ授業ヲハジメタルハ十一月ニシテ年末生徒ノ数ハ豫科第三級ニ二十八名同仮入学ノモノ五十四名アリ。」

これに対し、四高中については次のように書かれている。

「第四高等中学校ハ本年四月之ヲ設置シ：九月ヲ以テソノ授業ヲ開ケリ。年末生徒数ハ豫科ニ八十一名、本科ニ六名アリ。本校ハ斯ク他ノ創設ノ学校ト其ノ趣ヲ異ニスル所以ノモノハ蓋シソノ地従来石川県設置ノ専門学校アリ。其ノ生徒ヲ養成スルコト既ニ久キヲ以テ応募生徒ハ多ク、此校ヨリ出テ且ツ学力素アルモノ少ナカラザルニ因ルナリ」(傍点引用者)

石川県専門学校在校生が主として受けた四高への転入試験は、明治二十年九月七日の石川県告示一三一号で公示され、豫科三級から本科一年(豫科三、二、一、級本科一年)の四段階の編入試験がそれぞれの試験科目、内容程度が示された。⁶⁾ 豫科二級からは、国語及び漢文、第一外国語、数学のほかに、地理、歴史、博物学、図画が加わり、本科一年からでは、さらに物理、化学が加わる。それぞれ

表2 1888~89(明治21~22)年
高等中学校学生構成

| | 二高中 | 四高中 | 五高中 |
|-------|-----|-----|-----|
| 本科二年 | | 4 | |
| 本科一年 | | 13 | |
| 予科一級 | | 27 | |
| 予科二級 | 15 | 41 | 15 |
| 予科三級 | 29 | 32 | 83 |
| 補充科一級 | 39 | 80 | 45 |
| 補充科二級 | 123 | 61 | 117 |
| 合計 | 206 | 258 | 260 |

表1 創立時1887~88(明治20~21)年
高等中学校学生構成

| | 二高中 | 四高中 | 五高中 |
|------|-----|-----|-----|
| 本科一年 | | 6 | |
| 予科一級 | | 16 | |
| 予科二級 | | 24 | |
| 予科三級 | 7 | 42 | 28 |
| 合計 | 7 | 88 | 28 |

表3 1889~90(明治22~23)年
高等中学校学生構成

| | 二高中 | 四高中 | 五高中 |
|-------|-----|-----|-----|
| 本科二年 | | 8 | |
| 本科一年 | | 21 | |
| 予科一級 | 13 | 35 | 11 |
| 予科二級 | 27 | 29 | 51 |
| 予科三級 | 36 | 47 | 36 |
| 補充科一級 | 88 | 42 | 66 |
| 補充科二級 | 149 | 25 | 46 |
| 合計 | 313 | 207 | 210 |

試験範囲の教科書や程度が示されている。それを数学の程度で見ると、豫科三級では、「算術全体、代数一元一次方程式終マテ理論及演算幾何直線形及圓」豫科二級では、「代数多元二次方程式終マテ理論及演算幾何平面幾何全体」豫科一級では、「代数二項法終マテ理論及演算幾何立体幾何全

体ウイルソン氏立体幾何」本科一年では、「代数全体理論及演算幾何平面幾何全体、立体幾何全体ウイルソン氏立体幾何、トドハンタル氏大三角法第一五篇マデ」である。

これらの入試の程度は、当然「尋常中学校ノ学科及其程度」(文部省令第一四号)の相当学年の一年次下の課程の程度にあわせてである。なお、藤岡作太郎は、この試験で予科一級への入学を許され、翌年本科に進み、特待生になった。⁷⁾

創立時から三年目一八九〇(明治三三年)までの二高中、四高中、五高中の生徒構成は、前頁のとおりである。この表も当時の第四高等中学校の学力水準の高さを示している。⁸⁾

以上は、新設当時の第四高等中学校の入学者の学力水準の面からの考察である。

3、明治二十年代前半(一八八七〜九二)における石川県人の高等教育界での優位

周知のように、三宅雪嶺(一八六〇〜一九四五)は、加賀藩の筆頭家老本多家に仕える医者の子に生まれたが、「自分を語る」の中で次のように言っている。

「明治初年の金沢の雰囲気は一種独特のものがあつた。前田藩には学問や文芸を重んじる気風があつた上に、幕末に外様第一の大藩でありながら、明治維新に際しては、一四代藩主慶寧の逡巡から薩長土肥の後塵を排し、明治維新政府には一人の頭官をも出し得なかつた。中央に出なかつたエネルギーのはけ口は学問、文芸に求められ、

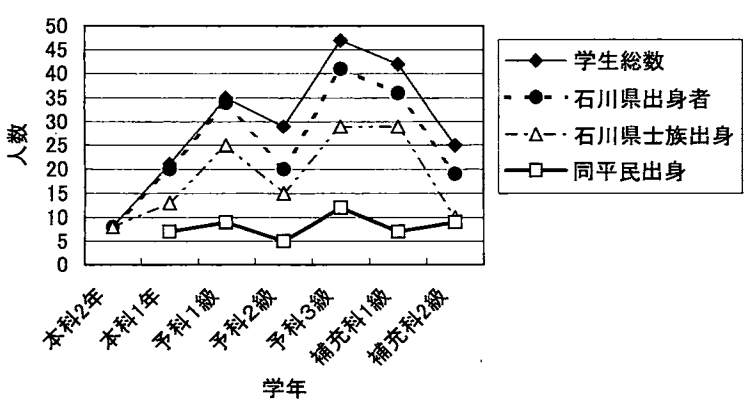
学問によつて薩長を見返してやろうという空気があつた。⁹⁾」
 同様の思い出話は、雪嶺より少し後の世代のいわゆる「三太郎」(西田幾多郎、鈴木貞太郎、大拙、藤岡作太郎)の遺著などのかにもみえるが、幕末・維新期の金沢は、地方都市としては確かによき教育環境があつたようである。

ただし、その考察自体は別の機会に譲り、ここでは、その成果として明治二十年代中期頃東京の地で当時の高等教育機関に石川県人が多くを占めていたことを裏付ける発言を紹介したい。

なお、第四高等中学校が二高中や五高中に比べ、圧倒的に高い学力を示していた明治二二年から二三年の地域別・身分別の学生構成をグラフ化する

と、以下の通りである。
 二高中や五高中の構成はここでは省略するが、四高はこれらの高等中学校に比べて、圧倒的に石川県人が多く、この時期で

1889~1890(明治22~23)年第四高等中学校在校学生の構成



は、その中でも士族の子弟が圧倒的に多かつた事が分かる。

ここでは、郷土の学生有志がつくった互助組織、久徴館（東京）から発行された『久徴館同窓会雑誌』^{〔1〕}からいくつかを抄録してみよう。

『久徴館同窓会雑誌』の中で石川県、金沢市の出身青年の高等教育機関での活躍を示す言葉は、一八八九（明治二二）年二月発行の第八号にはじめてみられるようである。それは、帝国大学寄宿舎出火により、早川庄次郎八当時医科大学二年、早川千吉郎の弟ノ焼死の葬儀における渡辺帝国大学総長弔辞のなかにある。「石川県は学者を出すこと多しとの評判ありて、君も…」という部分である。明治二四年十月発行の四十号の松崎竹雄「石川県の士族」では、「石川県ノ如キ教育ノ点ニ於テハ敢テ一籌ヲ他府県ニ輸セス。畜ニ輸セサル而已ナラス却テ之ヲ凌駕シ去ラントスルノ勢アリ」という自負の言葉がある。

一八九二（明治二五）年十月三十日の『久徴館同窓会雑誌』五二号では、久徴館の創立者のひとり土岐 横が「久徴館同窓会第九回總會あいさつ」の中で次のように言っている。

「人材養成ノ点ニ於テハ、石川県ハ余リ歩ヲ他県ニ譲ラナイト私ハ考エルノデス。石川県ニ育英社ノ興ツタノモ、久徴館ノ起ツタノモ随分古イコトデアリマス。其ノ他ノ県、他ノ国ニモ是ニ類シタル：石川県ハ先鞭ヲ着ケタト言ッテ一向差支ナカロウト思フノデアリマス。…石川県ハ他ニ先ンジテ立派ナコトハデキナカツタケレドモ、自分ノ子供ヲ教育スルト云フ点ニ於テハ余程熱心デアッタロウト思

フ

また、明治二六年一月発行の五五号、「新年初刊の辞」では、

「我三州人は維新の競争に敗れたり、社会の大潮に後れたり、然れども…他日陸軍の権を握るは三州人の手にあらんと…現時帝國大学に学ぶもの其数全国に冠たり…」と言い、明治二六年三月発行の五七号、では、

「帝國大学に於いて常に石川県人の他県人より多数を占めるは皆人の知る所なるが、第四高等中学校の設立以来は頓にその数を増し、今日にところにては東京を除きては、正に第一位なり。すなわち、東京府は一九五人、石川県は七七八人、新潟県は五三人、山口県は五二人…」と具体数を挙げて誇っている。

明治二七年二月号発行の第六八号には、「帝國大学学生生徒府県別人員表」が載るようになり、そこでは、総数一四〇八名中、東京の一八九名について、石川八三名、山口六四名、福岡、新潟が同数で四九名、鹿児島四五名（以下略。ちなみに富山は、一四名）となっている。この時期は、四高中が、二高中や五高中より生徒の質や数において優位を守っていた時期とつながっている。

以後の状態については、次項でみる加越能育英社の「明治三五年からの地域有志からの大募金活動」の趣意書がその凋落ぶりを嘆いているが、その内容をみるのが手っ取り早い。

「我が育英社ノ創設セラルルヤ幾モ無ク旺盛ヲ致シ我三州出身ノ人士ニシテ進ミテ帝國大学陸海軍諸校及文部省直轄学校ニ入り若ハ既ニ業ヲ卒テ各其ノ志ス所ノ業ニ当レル者前後接踵屈指ノ違アラズ。

此時当テ我育英奨学事業ノ熾ナルヤ東京一都ヲ措ケバ実ニ全國ニ冠タリキ。：先ニハ我地方ノ人士陸軍士官学校ニ入学スル者諸府県出身者多寡ノ順位ニ於テ石川ハ全國冠タリシモ第十一位ニ退キ：又海軍兵学校ノ数ニ於テ石川ハ第二位ヲ占メシモ今又第十二位ニ退キ：次ニ帝國大学在学者数ノ如キ之ヲ数年以前ニ觀ル時ハ石川ハ東京府ヲ除キテ優ニ全國ノ第一位ヲ占メタリシモ今ヤ頓ニ二十八位ニ退キ：」⁽¹²⁾

明治三十年代に入ると石川県人の劣勢があらかになり、山口県にお株を奪われてしまう。山口県人の高等教育進出がピークの頃、外山正一が『藩閥の将来』⁽¹³⁾で長州閥の教育の勝利を統計的に明らかにするが、その時代も長くは続かず、高等教育界に優勢を誇った士族子弟に対し、全国的に平民の子弟が進出してくるといふ「時代の大波」が押し寄せ、藩閥意識的な地域対抗の図式自体を影の薄いものにしてしまう。⁽¹⁴⁾

4、維新後の前田家の育英事業

多数の石川県人を高等教育機関（や軍人の幹部養成学校）へ送り出すために直接的に貢献した理由の一つは、その育英事業であった事はいうまでもない。

石川県の育英事業（育英社）の開始は、全国でもっとも早いものであったと言われ、⁽¹⁵⁾また、内容的（資金、対象学生数）にも、もっとも充実したものであったと思われる。

育英社は、一八七九（明治一二）年にはじまると言われる。

『育英社沿革誌』には、「有志ノ間ニ県人子弟ノ秀才ニシテ学資ノ補助ヲ必要トスル者ヲ選抜シ之ヲ志望ノ専門学府ニ入レ其ノ成業ヲ遂ゲシメ國家有用ノ材トナサムトノ議起リ其ノ資金ヲ広く両県人同志ノ贖金ニ俟ツコトトシテ先ズ発起人トモ見ルベキ六名ノ間ニ金拾八圓余ヲ積立タリ之ヲ育英社ノ濫觴トス」⁽¹⁶⁾とある。

この発起人の六名については、『育英社沿革誌』が明治一五年四月一五日の第一回の会計報告に幹事長堀尾晴義、幹事常務委員に北島信厚、桜井房記、猪山成之とあることから、この四名を含むことを推定しているが、正確には「知ルニ由ナキ」という。

ところで、翌明治一三年に定めた社則には、次のように述べられている。当時の時代意識や地域認識を表す重要な叙述とも思われるので、長文であるが、興味深い部分を引用してみたい。

「：学業ヲ修メ凡百ノ技芸ヲ習ヒ以テ國家ノ用器トナルハ人民ノ其分ヲ尽ス所以ナリ。維新以來偉人傑士草莽ヨリ出テ廟堂ニ立チ卒伍ヨリ起コリテ將帥ニ登リ或ハ学士トナリ或ハ巨商トナリテ其ノ名声ヲ天下ニ籍甚スル者多シ。而ルニ我加越能三州ヨリ出ル者ヲ求ムルニ其人幾クモナシ。是何ノ故ゾヤ。熟々三州曩日ノ事情ヲ察スルニ土地膏腴、五穀豊饒、山ヲ鑄海ヲ煮、百者具備、一モ足ラザルヲ知ラズ。是ヲ以ッテ人々其天富ニ安スンジ、且怠惰ニシテ天稟ノ材幹ヲ伸ブルモノ者少ナシ。是偉人傑士ノ出デザル所以ナリ。：」⁽¹⁷⁾

ここには、石川県が、豊かな土地柄であるがゆえに安逸に狎れ、維新の大業に遅れをとった結果、要路に活躍する人材が乏しく、こ

れをなんとか挽回しなければならぬという強い危機感、使命感が漲っている。また、この頃までの高等教育進学者は、旧士族出身者が圧倒的に多かったことが知られ、石川県でもその例に漏れないが、この文章には武士的な意識、責任感があらわれてもいる。

一八八二（明治一五）年頃には育英社は、社（金）員も増え、拠出金額七八六円となったが、注目すべきは、この年からすでに旧藩主前田利嗣から七分利付公債証書額面二千元という大きな金額の寄贈を受けたことである。「爰ニ始メテ本社事業ノ目的タル生徒ヲ募集スル資ヲ得」た結果、石川県庁の推薦により、金沢（石川県）専門学校から高嶺三吉（帝国大学文科に進学したが、脳病で「修業半途に斃れる」）、森外三郎（大学予備門から帝国大学卒業、のち三高校長）を給費生に決めたのが最初という。

明治一七には社則を「補足」し、国家の軍備の拡張に協力すべく「武学生徒」の養成にも力を入れた。前田利嗣より、さらに二万五千元の寄付があり、内一万五千元は（旧藩士族の）「陸海軍（での勢力）拡張の御主意」のためである。

この意を受けて、この年には「武学生」養成のため、広坂の旧益智館の建物を買い取り陸軍士官学校（一八七四〇明治七〇年創立）、海軍兵学校（一八七六〇明治九〇年創立）進学志望者の予備教育のため、「金沢学校」を創設し、二七名の生徒を選び授業を開始し、最盛期は在学生一四四名に達した。しかし、上述のように一八八六（明治一九）年十一月、金沢に第四高等中学校が創立される事が決

まると、その校地・建物はすべてその使用のため県に寄付し、高等中学校に軍人養成の予備教育の役目を期待し、金沢学校は閉鎖した。「現今猶ホ武官出身者ノ（加賀に）多キヲ見ルハ實ニ之ニ起因セリ」という。

なお、一六年六月に大学及び大学予備校入学の生徒にも給することとなった。また、二十年七月よりこれまでの給費生も貸費生に改め、貸費生制度が以後「加越能」育英社の一貫した方針」となった。

この後の旧藩主前田家の寄付状況を見ると、一八八五（明治一八）年 文学生養成資金として、「金壹千円ヲ五カ年賦ニテ寄贈」

明治二四年 文学生養成資金として、「金貳千円ヲ十カ年賦ニテ寄贈」

明治二七年 「日清戦役ノ突破ハ陸海軍人養成ノ必要ヲ痛感シ、専ラ其ノ画策ヲナスヤ前田侯爵家ヨリ…金壹千五百円ノ寄贈アリタリ」

明治三十年 「金壹萬円ヲ基本金トシテ寄贈アリ」

明治四四年には、それ以降「十五カ年間毎年金七千五百円ノ寄贈ヲ受クルニ至テハ本社ノ一大福音ニシテ…」などとある。

一八八五（明治一八）年一二月に侯爵前田利嗣（加賀前田家一五代当主）が育英会社長（明治二三年規則改正により総裁）になり、

明治二九年一月には、伯爵前田利同（旧富山藩主）、子爵前田利邨（旧大聖寺藩主）がそれぞれ副総裁に「推戴」された。この時点で、名実ともに支藩をふくめた旧加賀藩の育英機関となったといえるよう。

侯爵前田利嗣は、一九〇〇（明治三三）年六月に亡くなると、侯爵前田利邨が総裁になった。この間、明治二八年からの、あるいは、明治三五年からの地域有志からの大募金活動や明治三八年からの断続的に石川、富山両県費からの補助もあった。

しかし、このようにみえてくると、はじめは民間有志の発起ではじまったとされる育英社の事業も、資金を旧藩主たちに大幅に依存しなければならぬため、事実上支藩を含めた前田家の旧藩士救済事業の一部であったと言える。

おわりに

石川県では、戦後幕末・維新期の加賀（金沢）藩の教育・学術にかかわる今井一良氏などによる精緻な個別研究が蓄積されている。今回これらを通読して、加賀藩の洋学学習の努力が早くから本格化していたことが推定される。また、最近の蔵原清人「金沢藩明倫堂の和算教育」¹⁹、「金沢における洋算教育の展開」¹⁸、「金沢における洋学の展開と壮猷館」¹⁹などによると、加賀藩ではもともと和算の教育・学習がさかんであり、明治初期の洋算への移行も関口開の存在によりスムーズにいったと思われる。夏目漱石の将来志望に決定的影響を与えた米山保三郎の例のように、石川県出身学生は数学ができる

事でも知られていた²⁰。

上述の明治中期の郷土の高等教育進学状況をみても、寛政期以来の藩校での漢学学習の伝統に加え、早くから正則の洋学をめざし、洋算の普及も早かった加賀藩（とりわけ金沢）は、学校制度が整っていなかった明治初期、最新の学問を学ぶ下地が他の地域よりずっと豊かだったと推定される。

以上を踏まえ、幕末・明治中期までの石川県教育は、

- (1) 向上心旺盛な没落士族や下級士族を多く抱えていたが、これに関係する旧藩主の教育方面での寄与（第四高等中学創設時の巨大な寄付、育英事業への援助）が大きな力となった。
 - (2) 幕末にいたって海防の必要から急激に洋学学習に傾斜し（壮猷館の設置とそこでの訓練、学習の展開）、多くの士族が、早くから洋学習得の雰囲気になれ、英仏の語学や自然科学に堪能な多くの青年を早くから育てる事になった。
 - (3) 数学においても数学を重視する伝統が早くからあり、関口開などの優秀な数学教師に恵まれたこと。
 - (4) 石川県では、向学心に富んだ学生は先ず金沢に集まった。金沢は地理的に密集した城下町であり、彼らの勉学や交流に恐らくは好条件の町だった。
- と考えられるのであるが、その検証は又別の機会を期したい。

(1) 国立教育研究所編『日本近代教育百年史 4 学校教育2』1974、410頁参照

- (2) 辻文部次官演説(「7月24日教育懇親会に於て」『石川県学事報告』第13号、明治19年7、8月。『金沢大学50年史』通史編、2001。45～51頁などを参照)
- (3) 『石川県学事報告』第22号、明治21年
- (4) 新修『森有礼全集』第二巻、文泉堂244～245頁参照。
- (5) いずれも『文部省第15年報』明治20年、45～6頁
- (6) 『石川県学事報告』第20号明治20年
- (7) 藤岡由夫『藤岡東圃追悼録』(増補版) 1962年、2～3頁参照
- (8) 以上は、各年度の各高等中学校便覧(金沢大学蔵)により作成した。
- (9) 三宅雪嶺「自分を語る」(『石川近代文学全集』12巻)
- (10) 上田 久『山本良吉先生伝』南窓社、1993、参照
- (11) 『久徴館同窓会雑誌』は、『金沢市史 資料編15学芸』257頁参照。なお、以下引用の『久徴館同窓会雑誌』は、いずれも金沢市立玉川図書館蔵
- (12) 『育英社沿革誌』育英社 1929。16頁
- (13) 外山正一『藩閥の将来』博文館、明治33年
- (14) 天野郁夫『学歴の社会史』新潮選書、1992参照
- (15) 『財団法人加越能育英社百二十年史』加越能育英社1999、28頁参照
- (16) 『育英社沿革誌』1頁
- (17) 以上この項の記述は、すべて同上書による。
- (18) いずれも、幕末維新学校研究会「幕末維新时期における「学校」の組織化」、多賀出版、1996所収
- (19) 『工学院大学共通課程研究論叢』第37巻2号、2000。
- (20) 「石川県特有のもの」『久徴館同窓会雑誌』53号、明治25年
(えもり いちろう 金沢大学教育学部教授)